



編集：安齋育郎、山根和代

翻訳者：赤松敦子、狩俣英美、寺沢京子、山根和代、山本美穂子、山本桃子

## イ・ジュン平和博物館記念ホール落成式（ハーグ）

1995年に開館されて以来、ハーグにあるイ・ジュン平和博物館が入っている歴史的な建物の広い一階は個人経営のビリヤード・パレスというビリヤード場として使われていました。賃貸借契約の期限が過ぎてからも、借主がこの建物を出て大ホールが博物館の拡張のために利用できるようになるまでに、長い年月がかかりました。韓国政府の寛大な支援のおかげで、この数年で、このホールは改装され、博物館として使用するのに適した状態になりました。

韓国政府は更に、韓国の大規模な国立博物館である独立記念館に、改装後の新しいスペースに置く常設展示を制作するよう依頼しました。「ヨーロッパにおける韓国独立運動」というその展示は、イ・ジュンの生きていた時代に、日本による不法な植民地化に対して韓国が独立するためにどれほどの努力がなされたのかを資料で明らかにしています。

この博物館は1907年の第2回ハーグ平和会議の期間中に、ホテル・デ・ヨングで悲劇的な死を遂げた韓国大使かつ検事のイ・ジュンを記念して創立されました。このホテルの建物が現在のイ・ジュン平和博物館となっています。



博物館の外でのクリッキ氏とキー・ハン・リー氏（イ・ジュン平和博物館館長）（写真：ペトラ・ケプラー）

国による経済的支援を得て行われた改築の後に、およそ200人の政府高官の臨席を賜り、11月18日にこの博物館の改築落成式が行われました。ハーグ駐在の韓国大使ヘー・リー・ユン・ヤン氏、ハーグ市長ポーリーン・クリッキ氏も

来賓として参加されました。INMP代表として事務局長であるペトラ・ケプラーが INMP からの花束を贈呈しました。



博物館前でのテープカット：朝鮮戦争に参加したオランダ人退役軍人の方、リー氏、クリッキ氏、リー夫人、ユン・ヤン氏（写真：ヨンハップ・ニュース）



イ・ジュン平和博物館の新しい記念ホール

（翻訳：赤松敦子）

### アエンブ地域平和博物館（ケニア）

キンバリー・ベイカー（カナダ、バンクーバー、ブリティッシュコロンビア大学博士号取得候補者）

2017年12月にアエンブ地域平和博物館は「語り合う輪」の会を設けました。この会は、地元の地域共同体の年配の人々と若者が断絶しているのはなぜなのか理解するという目的を持っ

て始められました。この博物館は、地域平和博物館遺産財団(CPMHF)の傘下であり、地域共同体に基盤を置く平和博物館のケニアでのネットワークに参加しています。CPMHFは1994年にスルタン・ソムジー博士によって創立され、伝統的文化遺産である知識を活用して、市民社会の中で紛争を予防し、持続可能な発展を促進することを目標としています。

4日間以上「語り合う輪」は続き、アエンブ博物館評議員である長老の皆さん(ニセタ・ウエルマ・ムゴ、ラエル・ムティトゥ・ムゲラ、モーゼス・ムニ・ガイタ)と二人の若者(ヴィクター・ンジュ・カスリ、ヴァイオレット・ワンディリ・ムゴ)、同博物館館長(ステファン・ンジル)、博物館招聘芸術家(エファンタス・ングンギ・ンジル)、そして筆者が平和についての物語、歌、踊り、諺、物質的な文化について語り合いました。

アエンブ地域平和博物館は私の研究現場の一つです。私の研究テーマである「平和への航海術」では、紛争地域における博物館が、市民社会の中に平和を維持し、地域社会を構築することを目的として、先住民の平和についての伝統的な遺産を活用する方法に精通するためにソムジー博士の研究を基にしていることを取り上げています。私の研究手法は先住民調査研究方法論に従っており、この方法論はこのような研究がその地域社会の関心事に焦点を当てべきであり、将来その地域社会の

役に立つ知的財産となるべきであるとしていいます。ステファン・ンジル館長が地元の文化についての案内役を務めて下さり、私が地元の文化的慣習を理解し、それに従って行動できるようにご支援くださいました。



アエンブ博物館評議員である長老、若者たち、館長、博物館招聘芸術家

「語り合う輪」の初日に、長老の皆さんは、地域社会の中で文化的な伝統が失われてきていることについての懸念を表明されました。そして若者たちから尊敬を受けていないと感じることについて語られました。若者たちは、今日の若者が自分たちの文化についてどれほど無知であるか、そしてどれほど無関心かについて述べました。

2日目にはこの対話で参加者は、植民地主義、教会、英国植民地支配に対する独立運動に重要な役割を果たしたマウマウの自由の戦士たち、ケニアの独立などのような歴史的な出来事を中心として語りました。私はソムジー博士の近々出版される予定の書籍『夢を見るものは預言者と呼ばれる』からの抜粋を読みました。この500ページの本には、ソムジー博士がケニアの様々な部族を訪ねる旅とそこでの現場経験に基

づく想像上の物語が収められています。主人公のアラマはソムジー博士の分身で、平和の源を求めてカタカ(ロキチャイ)から徒歩でその旅を始めます。この話では、物語がたき火の周りで語られていた時代の思い出が語られていました。

※編集者注：「カタカ」は、ロキチャイの町に物語の中でソムジーが与えた想像上の名前。



『夢を見るものは預言者と呼ばれる』からの抜粋を読むキンバリー・ベイカー

「語り合う輪」の4日目には、私は参加者の皆さんに私の研究結果について発表させていただきました。(1)長老の皆さんは彼らの智慧を子どもたちや若者

と分かち合いたいと希望していること。(2)聖なる平和の木のある場所は文化を継承するためにも環境を守るためにも維持される必要があること。(3)アエンブ地域平和博物館は長老と若者を繋いで平和についての伝統的遺産について学ぶ機会を提供する最後の架け橋であること。

私はその「語り合う輪」のグループが示唆していたいろいろな考えについても特に述べさせていただきました。その考えを実行すれば、長老と若者の間

の対立を解決することができるかもしれませんが。長い話し合いの後にそのグループでは、新しく「長老の智慧」という学校のようなプログラムを博物館を訪れる子どもたちに実施するということに意見がまとまりました。

このプログラムでは、学校の子どもたちがこの博物館に来て「語り合う輪」に参加し、そこで長老と話し、長老から伝統的文化遺産である平和についての教えを学ぶのです。そして生徒たちは聖なる平和の木を訪れ、そこでその場を守ることの大切さを教えてもらいます。

この対話では参加者はいつも地域社会の幸福ということを中心的な概念として意識していました。この学校プログラムの収益は、この地域共同体の中の夫や妻や親を亡くした人々を支援するために寄付するということが決定されました。



博物館評議員を務める長老：（モーゼス・ムニ・ガイタ、ニセタ・ウェルマ・ムゴ、ラエル・ムティトゥ・ムゲラ

（翻訳：赤松敦子）

## ニュルンベルグ平和博物館 20 周年記念

ドイツのニュルンベルグ平和博物館は、今年で開館 20 周年を迎えました。それに先立ち博物館は改装され、3 月 23 日再オープンの予定です。エリク・ウィンター館長の招待により、INMP はお祝いのメッセージを送りました。20 周年特別展として、「We are 20! (20 周年!）」をタイトルに、ニュルンベルグ平和博物館のこれまでの歴史を平和運動の数々の成果（当博物館も平和運動の一つであると思っています）とともに展示しています（12 月 19 日まで）。6 月 30 日には、記念行事の一環で大きな催しも開催されます。詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.friedensmuseum.odn.de>



記念特別展のポスター  
「We are 20! (20 周年!）」

（翻訳：山本美穂子）

## ルムニク・ヴルチャ（ルーマニア）の新しい平和博物館

1月19日に、ヴルチャ平和博物館という新しい平和博物館が、ルーマニアのルムニク・ヴルチャ市（ルーマニア中南部ヴルチャ県の都市）に誕生しました。ローマ時代にまで遡ることができる歴史的なこの街には、92,000人が暮らしています。ルーマニア初で、南東ヨーロッパでも初めてとなる平和博物館は、平和と人権の活動家であり、2つのオンライン新聞（“Diplomatic Aspects”（2009年）、“Diplomatic Intelligence”（2014年））の設立と編集を務める、マグダレナ・クリスティナ・ブトゥッカにより設立されました。2017年、彼女がウィーンの平和博物館でボランティアをした折に、母国ルーマニアに同じような教育施設を作りたいと刺激を受けました。博物館設立の主な目的は、平和のコンセプトと平和教育の情報を広く普及することです。また、平和教育に関するコースの紹介のため、大学や高校とも話を進めています。



ヴルチャ平和博物館のロゴ

ウィーンの平和博物館の設立者、リスカとデイビッド・プロジェクトと、館長のアリ・アーメッドが、開館記念式典に参加しました。式典は、テレビやラジオ、記事を通じて、地元だけでなく国立メディア等でも幅広く報道されました。ルーマニア国立通信の報道は、こちらからご覧ください。

<https://www.agerpres.ro/cultura/2018/01/19/valcea-muzeul-pacii-deschis-oficial-la-ramnicu-valcea--40275>



マグダレナ・ブトゥッカ、ヴルチャ平和博物館の開館式にて

ラジオ・ルーマニアによる報告では、多くの写真も見ることができます。

<http://www.radiocraiova.ro/la-ramnicu-valcea-s-a-deschis-primul-muzeu-al-pacii-din-romania/>

写真展のオープニングの様子（6分間、ルーマニア語）はこちらです。

<https://www.youtube.com/watch?v=3Y8gh4L1VJQ>

博物館の開館から数日後、アンドリュウ・ニクレスクの「平和とアメリカ」という、社会的な平和に関する写真展

が開催されました。詳細は博物館のウェブサイトをご覧ください。

[www.peacemuseumvalcea.eu](http://www.peacemuseumvalcea.eu)



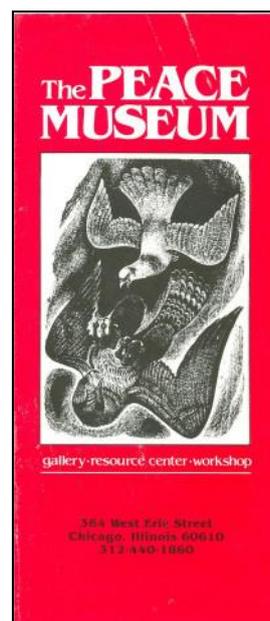
リスカ・プロジェクト、写真展のオープニングにて

(翻訳：山本美穂子)



### 「シカゴ平和ミュージアムの起源」

シカゴ平和ミュージアムは、アメリカで初めての平和ミュージアムで、当時は（日本以外で）世界でも稀な平和ミュージアムの一つでした。ユニセフのアメリカ前代表であるマージョリー・C. ベネトンさんと、シカゴの卓越した壁画家、マーク・ロゴビンさんの努力によって、1981年に創設されました。二人は、芸術が平和を促進する手段として十分に捉えられていないと感じ、「芸術が戦争の脅威をいかに強く伝え、平和への先見や希望を豊かに表し、深く関わり影響力を与え得るか」を認識していたのです。



シカゴ平和ミュージアムのチラシ

広島や長崎のヒバクシャによって描かれた絵「忘れざる火」をアメリカで初めて展示したのも、このミュージアムです。1983年～84年にかけては「平和を我らに」と題した、特にベトナム戦争間の、フォークやロックミュージシャンによる平和ソングや運動を紹介しました。

ミュージアムの展示がどのように作られたのかやミュージアム自身のことなど、魅力的な話は一連のインタビューで知ることができます。2013～14年に「決して同じではない(Never The Same)」という記録プロジェクトの一環として、ロゴビンさんがレベッカ・ゾラクさんと作成したものです。1960年代以降にシカゴで、芸術が社会的、政治的に関わってきた様子がわかります。17頁にわたるインタビューは Never The Same の[サイト](#)で読むことができます。（平和ミュージアムに関しては 10～17頁）

ロゴビンさんは1974年にミュージアムの着想を抱いていましたが、実際にオープンするまで7年かかりました。オノ・ヨーコさん、U2（アイルランドのロックバンド）、スタッド・ターケルさんなどがミュージアムを支え、素晴らしい活動をしたことも語っています。また、ミュージアムの閉鎖という悲しい話もあり、多くの貴重なポスターや芸術品の行方も語っています。



「平和を我らに」展でのジュリアン・レノン、オノ・ヨーコ、マリアン・フィルビン、マーク・ロゴビン

(翻訳：寺沢京子)

### 「戦争の学習はこれ以上するな」という展示：ベルリンの反戦博物館

1月30日から4月30日まで、ベルリンの反戦博物館では「戦争の学習はこれ以上するな：平和のための詩と写真」という新しい会展示をします。いつものようにその企画展示はベルリンにあるガンジー情報センターと協力して作成されました。



平和の鐘

2枚の大きなパネルと45枚の小さなパネルからなる展示物を作成したのは、Christian Bartolf、Marion GerickeそしてDominique Miethingでした。その展示の焦点は、広島と長崎の原爆投下、そしてベトナム戦争でした。すべての展示は、まもなくオンラインで見ることができるようになるでしょう。平和と音楽に関する最大で成功した展示は、「平和にチャンスを与えよ」でした。この展示は1983-84年にシカゴ平和博物館で展示されましたが、小野ようこ氏の協力がありました。（上記の記事をご覧ください。）その展示ではベトナム戦争に反対する音楽に焦点が当てられていました。ちょうど音楽が多くの人々を鼓舞して動かす力があるのと同様に、音楽、コンサートの映画、演奏のある反戦の展示は、平和博物館が特に若者や新しい聴衆を魅了するのに効果的です。

(翻訳：山根和代)

### 「西部戦線異状なし」ーリューベック（ドイツ）での企画展

エーリヒ・マリア・レマルクは、1929年、『西部戦線異状なし(Im Westen

*nichts Neues*)』を出版し、世界的な名声を得ました。レマルクは、小説の中で、第一次世界大戦の機械化された暴力が、徴兵された主人公のクラスメイト全員を破滅させていく様を描写しています。それは当時の戦争を激しく非難するものでした。20世紀最高の反戦小説であり、近代の工業化された戦争のありのままの姿を投影した作品として、多くの人々がこの物語を高く評価しています。そして、60以上の言語に翻訳されたこの小説は、タイトル自体が平和主義や反戦といった意味のスローガンを持つようになり、最も優れた世界的ベストセラーの一つとなりました。レマルクの平和主義者としての考えには、彼自身の戦争体験が根底にあります。しかし、小説も、同等の人気を博した映画バージョン（1930年）も、ナチス政権の拡大とともに発禁処分とされ、レマルク自身も亡命を強いられました。

レマルクと彼の残した名作の背景や現代的な解釈について紹介する企画展が、現在、ドイツのリュベックにあるブッデンプローク・ハウスにて開催されています。オスナブリュックにあるエーリヒ・マリア・レマルク平和センターと共同のもと、展示会は1月25日から4月15日まで開催される予定です。ピーター・アイクマイヤーとギャビー・フォン・ボステルによって制作されたグラフィックノベル版『西部戦線異常なし』の原画も展示されています。彼らは、レマルクが小説の中で描いたテーマ、場面、人々をグラフィック作

品として表現する試みを行いました。グラフィックノベルは、文学、映画、絵画、写真などの様々なメディアと関連する芸術表現の一つです。グラフィックノベルというアプローチは、小説への新しい視点を生み出し、この小説が持つ意義を深め、読者が小説とは異なった方法で歴史的出来事を追体験することを可能とするでしょう。この2つの芸術表現が並列した展示は、メディアが描くことができる／描くべきである戦争と暴力のイメージがどれほどの影響を与えるか改めて考える機会となります。



リュベックにあるブッデンプローク・ハウス

第一次世界大戦の終結から100年が経過した現在、この展示プロジェクトを開催した大きな目的は、若者のための教育政策への貢献です。その目的のために、今回の開催地ブッデンプローク・ハウスは、最も適切で意味のある場所となりました。1758年に設立された当

館は、作家トーマス・マンの有名な小説から名付けられました。小説『ブッデンブローク家の人々』は、マンがこの屋敷に住んでいるときに執筆され、1929年にノーベル賞を受賞した作品でもあります（同年に『西部戦線異状なし』は出版されました）。現在、この文学博物館は非常に重要視され、トーマス・マンに関する展示だけではなく、多くの作家を輩出したマン家についても常設展示として紹介しています。

(翻訳：狩俣英美)



### イギリス CND(核軍縮キャンペーン) 60周年記念展

イギリスの CND (核軍縮キャンペーン) は、平和や武装解除に向けての、世界でも最も古く大規模で大切な運動体の一つです。1958年2月17日、ロンドンの公式ミーティングで創られました。数日後の2月21日に、芸術家で平和活動家でもあるジェラルド・ホルトムさんがデザインを公表しました。そして、ロンドンからアルダーマストン（原子力兵器研究所があるところ）への行進を、国の原爆製造反対の数千人と共に行ないました。そのデザインは、すぐに CND のロゴとなり、次第に世界的な平和のシンボルになりました。CND の 60周年記念は、シンボルの 60年でもあります。



CND ロゴのオリジナルデザイン

ブラッドフォード平和ミュージアムでは、1月12日から2月23日まで「CND の 60年」展を行いました。展示にはバッジ、バナー、プラカードやポスターなどのキャンペーン材料が、ミュージアムの収集品から出されました。目玉展示品は CND シンボルのオリジナルデザインのコピーです。オリジナルは、J. B. プリーストリー図書館にある、ブラッドフォード大学特別収集品の中に在ります。ブラッドフォード生まれの有名な小説家で劇作家の J. B. プリーストリーが、CND の創設者の一人なのです。



2月17日のヨークシャーCND主催の大規模なパーティーにも、ミュージアムは加わりました。パーティーには、CND に深く関わった人や平和と武装解除のキャンペーンに長期にわたり関わった人が招待されましたが、自分たちにとって重要な一品を持ってくるように依頼されました。それらは展示され、幾つかはミュージアムに寄贈されました。

国際CNDは「CNDの60の顔」という優れたオンライン展を行なっています。キャンペーンで重要な役割を果たした60人の個人が紹介されているのです。各人の写真と平和への関わりの短い説明があります。60年にわたる非核運動に関わった数百万の方々の、代表ともなるものです。この[サイト](#)で見ることができます。

(翻訳：寺沢京子)

### 「石と鉄の記憶」ーゲルニカ平和博物館にて新しい企画展

スペインのバスク地方にあるゲルニカ平和博物館では、12月15日から、新しい企画展が始まっています。「石と鉄の記憶」と題した本展示は、バスク地方におけるスペイン内戦とフランコ政権の犠牲者の記憶の継承のために建てられた記念碑を紹介しており、9月16日まで開催される予定です。そして、本展示会の担当学芸員であり、歴史家のヘスス・アロンソ・カルバレスが執筆した、今回の展示と同じ内容を扱った書籍が、同時期に出版されることとなりました。



本の表紙

カルバレスの書籍、そして今回の展示は、バスク地方の公共の場所に建てられたモニュメントが、内戦時の革命的な場所であったと示すことを目的としています。フランコ政権を支持して犠牲となった人々の記念碑は、1930年代後半から70年代終盤までの間、いたるところに存在していました。一方、共和派を支持して犠牲となった人々への記念碑は、独裁政権が終了した以降にしか設立されることはありませんでした。



ヘスス・アロンソ・カルバレスと彼の新書

本と展示の両方は、内戦前・内戦後の記憶を記録すること、そして、数十年の間に犠牲となった共和派の人々がいた事実を社会的に認識し、その記憶を活性化させるための記念碑の重要な役割を分析することを目的としています。

(翻訳：狩俣英美)



平和のためのグローバル・アート・プロジェクト—2016 ギャラリー公開

平和のためのグローバル・アート・プロジェクトの創始者であり、監督（そして INMP 理事）であるキャサリン・ジョステンによれば、2016 年に交換された芸術作品から選ばれた作品の画像がこのプロジェクトのウェブサイト [website](#) の 2016 ギャラリーに掲載されたということです。



手作りの平和のシンボル

2016 ギャラリーには、ほぼ100のサムネイルが掲載されており、合計で260の芸術作品の画像を見ることができます。10本の動画と1本の音楽ファイルもアップされています。

それぞれのサムネイルをクリックすると、フルサイズの色とりどりで創造的なデザインの画像が表示されます。その作品を創った芸術家やその教師の写真と一緒に掲載されている作品も多くあります。それぞれのサムネイルはまた、提出された芸術作品やその作品を創った芸術家についての情報を提供し

ています。その作品を交換したパートナーグループについての詳細も掲載されています。そのパートナーたちは世界中に広がるネットワークを成しています。

参加者は（個人や家族から100人かそれ以上の生徒たちから成る学校の団体まで）自分の平和についての未来像を絵などに描写し、世界中に平和と友情のネットワークを広げる手助けとなる機会があることに対する楽しさや感謝の気持ちを度々表現しています。ぜひこのプロジェクトで集まった独創的な美しい作品の数々をご覧ください。



平和はあなたの手にある

『平和はあなたの手にある』はエステラというスペインのヴァレンシアにあるアメリカンスクールで視覚芸術を学ぶ生徒によって作られた作品です。

生徒たちは平和についての引用文に挿絵をつけるということに集中して取り組みました。彼らの芸術作品は彼らのプロジェクト・パートナーであるアメリカ合衆国のユース・センターに送られました。100人の参加者のうちの1人のマレーシアのクアラルンプール出身

の生徒は前掲の写真のような平和のシンボルを創っていました。生徒たちは10人1組で芸術作品を創り、その作品は4つの違う国の10のグループに送られました。

(翻訳：赤松敦子)

### 来るべき平和

#### —ナマヤによるピース・アート—

“来るべき平和“は、バーモントを拠点に活躍するアメリカ人作家、パフォーマンス・アーティストであり音楽家であり、朗読家、詩人、劇作家であるナマヤ（彼はまた2017年4月にベルファストで開催されたINMP第9回会議で発表を行った）によって制作された独創的で特異な彫刻です。彼の作品は平和の象徴と平和の花輪を表しますが、その花輪は氷の中に固められていて、氷は周囲の温度と下部に置かれた蠟燭によって一滴一滴ゆっくり溶け出します。

高さ9フィート（約2.8m）の同作品は、平和について思いを巡らせるためのアート作品としてふさわしい各地の台座に設置されています。彫刻とインスタレーションに関する4分のビデオは [URL](#) からご覧になれます。

“戦争のポルノグラフィ—“と題された別のインスタレーションでは、より写実的に、“Pentagon Man（国防軍人）”とアメリカ合衆国が死と破壊に費やしてきた数兆ドルの軍事予算を描き出し、戦争の影響および社会の軍事化を表現

しています。作品に関する6分のビデオはこちらの [URL](#) からご覧になれます。

これらの作品および他のインスタレーションやパフォーマンスプロジェクトは、ナマヤによって制作されており、これらは“B4ピース・アート（B4 Peace Arts）”と呼ばれるシリーズの一部です。

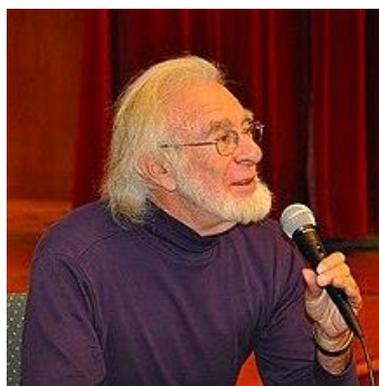
(翻訳：山本桃子)

### 世界中で花開く平和博物館

INMP ニュースレターの前号で紹介された「世界中で花開く平和博物館」と題された記事は、平和に関するニュースネットワーク（the Culture of Peace News Network：以下CPNN）にも掲載されています。該当記事が下記のURLからご覧になれます。

<http://cpnn-world.org/new/?p=11747>

CPNN はピースカルチャー、平和のための文化的活動を目的とした世界的な運動の一端であり、アメリカ合衆国によって創始されました。



デイビッド・アダムス氏

CPNNは、Culture of Peace Corporationが所有し、管理しています。同法人の創始者で会長のデイビッド・アダムス (David Adams) は、20年前の1998年にユネスコへCPNNを提起した人物です。

(翻訳：山本桃子)

### 「エヴィンより、愛をこめて」ーヒューマニティ・ハウスにて新しい企画展

オランダのハーグにあるヒューマニティ・ハウスでは、新しい企画展として「エヴィンより、愛をこめて」を開催しております。国際女性デーの次の日にあたる3月9日に正式にオープンする当展示会は、4月7日まで開催される予定となっております。テヘランにある悪名高きエヴィン刑務所に収容されたイラン人女性活動家たちによって創作された作品を展示しています。また、この展示会では、アムステルダムにあるフリー大学の協力を得て、イラン女性運動博物館（以下、IRWM博物館）を紹介しています。同博物館は、司書、ジャーナリスト、作家、そしてイラン女性のための人権運動活動家であるマンソウレ・ショジャエによってデザイン、開設されました。



展示されている手工芸作品

長い間、ショジャエは、イラン女性の博物館の構想を持っており、イランに住む女性のために、多くの図書館や文化センターなどを築いてきました。イラン人初のノーベル賞受賞者シリン・エバディの親友であるショジャエは、2007年にエバディのIRWM博物館の構想アイデアを紹介され、博物館設立のひらめきを得ることとなりました。しかし、IRWM博物館設立のプロジェクトは多くの困難を抱え、イラン政府によって中断させられる事態にみまわれました。2009年、ショジャエが逮捕され、エヴィン刑務所に勾留されたのです。現在、彼女は海外に避難しており、避難民プログラムで作家活動に励んでいます。

展示会のオープニングには、多くの著名なスピーカーが参加する予定です。シリン・エバディやハレ・ゴラシ教授（1988年よりイランから政治難民としてオランダに移住し、現在、アムステルダムにあるフリー大学で社会学部長を務める）、モナ・ホルム博士（国際女性博物館協会会長 ※同協会に関しては、2017年6月発行INMPニュースレターNo.19のIAWMの記事をご参照ください）が参加する予定となっております。

さらに情報が知りたい方は、下記のページをご参照ください。

<https://www.humanityhouse.org/en/evint/from-evin-with-love/>



(翻訳：狩俣英美)

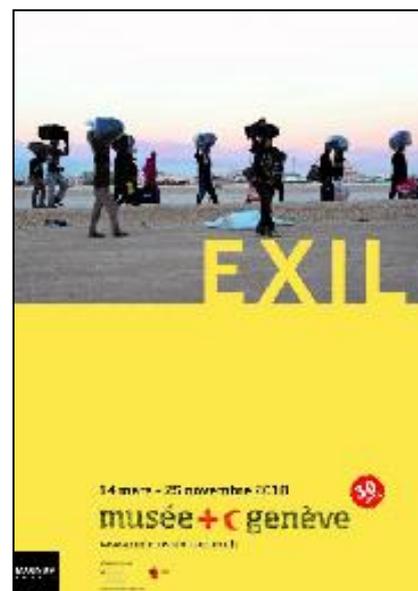
「エグザイル（避難生活）」  
国際赤十字・赤新月博物館  
(ジュネーブ) で新しい企画展

3月14日から11月25日まで、スイスのジュネーブにある国際赤十字・赤新月博物館では、「エグザイル（避難生活）」と題した展示会を開催いたします。フォトジャーナリスト団体のマグナム・フォトが提供した300枚を超える写真は、逃亡、放浪、待機、不安、恐怖・・・そして希望、といった避難移民の物語を伝えています。本展示では、それらの現代写真とともに、ロバート・キャパといった歴史上の偉大な写真家たちが残した作品が展示されています。スペイン内戦からベトナム戦争、旧ユーゴスラビアの紛争から中東での紛争、そして多くの難民がヨーロッパの門前に押し寄せている現状を

示しながら、当展示会は、世界と人間についての魅惑的なドキュメンタリー探求へと見学者を引き込んでいきます。

「エグザイル」は、伝統的な展示から冒険的なデザインの展示を通して、人生の旅路を表現しています。見学者は身体を使って写真に触れることや、写し出されている元々のイメージに手を加え、そこに写る人々の人生を全く異なるものに変えるなどの体験ができます。

世界的な人道支援活動をリードするNGOとして、今日の国際赤十字・赤新月博物館では、世界中に存在する飢饉や飢餓、人権侵害、戦争、紛争、自然災害、環境破壊といった要因によって避難生活を強いられた何百万人もの人々の為の支援を続けていくことを重要な活動として考えています。この課題は、30年前の開館当初から、当館の展示や教育活動を通して普遍的に論じられてきました。



企画展ポスター 写真提供トーマス・ドワーザク  
(マグナム・フォト、リビア、2011)

当展示会では、パリにある国際移民歴史博物館(*Musee national de l'histoire de l'immigration*)の協力により、移民によるアートや移民をテーマにした作品も展示されています。この博物館は、元々、フランス植民地帝国への貢献を目的として、1931年に設立されました。2007年にリニューアルした現在の博物館では、過去150年もの間、フランスの歴史が移民によって影響を受けてきたことを示し、来館者に新しい視点を与えています。このような歴史は伝統的に見落とされてきました。ヨーロッパでは類をみない、この博物館が持つ特有の役割は、フランスの学校や歴史の教科書などで欠けている教育的要所を補い、資料として提供していくことです。

(翻訳：狩俣英美)

#### ハーグでのベルタ・フォン・ズットナー生誕175周年記念プログラム

前回の通信で大まかに述べたように、ハーグにおけるINMPとベルタ・フォン・ズットナー研究所では、第一次世界大戦までのヨーロッパおよび世界の平和運動で指導的な役割を果たしたベルタ・フォン・ズットナーの175周年を記念して、様々な取り組みを計画しています。

彼女とアルフレッド・ノーベルの友情は、ノーベル平和賞創設につながり、彼女は1905年に女性として初めてノー

ベル平和賞を受賞しました。彼女の著書の『武器を捨てよ!』(1889年出版)のメッセージは、今日緊急に必要とされているものです。また彼女のエッセイである『軍備と過剰軍備』(*Ruestung und Ueberruestung*: 1909, 'Arming & Over-arming')および『空の野蛮化』(*Die Barbarisierung der Luft*: 1912; 英語版は *The Barbarization of the Sky*, 2016; 日本語版は 2013)も同様に、彼女が執筆した当時よりも今日のほうがずっと胸にこたえるような状況です。その行事は6月8-10日の週末に取り組まれる予定ですが、オーストリア大使館と平和宮図書館との協力で計画されています。金曜日にはベルタ・フォン・ズットナーの伝記作家や研究者が著書や、彼女が今日の平和運動まで与え続けている影響について語るセミナーが開催されます。土曜日にはイベントの合間に平和宮のガイド付き案内や、オーストリア元大統領のHeinz Fischer博士の基調講演があります。新著の『アルフレッド・ノーベルとベルタ・フォン・ズットナーの百人の友人』(*Alfred Nobel and 100 other peace friends of Bertha von Suttner*)が講演のなかで紹介されるでしょう。



夕方イ・ジュン(Yi Jun)に関する新しい劇が公演される予定です。彼は 1907 年第 2 回ハーグ平和会議に朝鮮の代表として参加しようとしたが、日本の妨害により、悲劇的なことにハーグで亡くなりました。日本が朝鮮の会議への参加に反対する中で、ベルタ・フォン・ズットナーは、朝鮮の代表者の要求を支持しました。最近改修しさらに拡張されたイ・ジュン平和博物館を訪問する機会もあることでしょう。(詳細は上記の記事をご覧ください。) 日曜日には、ベルタ・フォン・ズットナーが 1899 年と 1907 年に開催されたハーグ平和会議の間にハーグに滞在したことに関連した場所を、ガイドが歩きながら案内する予定です。参加者に制限がありますので、参加したい方は早めに登録することをお勧めします。詳細やホテルに関しては、次のメールアドレスにご連絡下さい。

[friendsofbertha@gmail.com](mailto:friendsofbertha@gmail.com)

(INMP 会員でベルタ・フォン・ズットナー研究所の連絡先) 記念行事に参加すれば、『空の野蛮化』のデジタル版を無料で入手できるでしょう。

(翻訳：山根和代)

これは世界で最低の写真か？

1月25日『原子科学者会報』(*Bulletin of the Atomic Scientists*)の役員は記者会見で、かの有名な地球滅亡を示す時計

の針が真夜中の2分前に動いたと発表しました。



写真は、「核のフットボール」と言われている「大統領の緊急かばん」を運んでいるアメリカ大統領の側近です。その書類かばんには、核兵器の発射に必要な情報が入っていて、大統領がホワイトハウス以外のところで、安全にコミュニケーションが取れない場所にいる時にいつも大統領の傍にいる側近がそのかばんを運んでいます。詳細は下記をご覧ください。

<https://thebulletin.org/how-nuclear-attack-order-carried-out-now11455>

この写真は、シェイクスピアの言葉「地獄には誰もいなくて、すべての悪魔はここにいる。」(『テンペスト』)を思い出させます。下記をご覧ください。

<https://vimeo.com/254468723>

(翻訳：山根和代)

新書の出版案内

上記の記事で紹介した新刊本以外に、ドイツ語で書かれています。平和とツーリズムに関する本があります。

“Dort, wo unsere Grossvaeter gegeneinander kaempften ...” Die “Friedenswege” an der Frontlinie des Ersten Weltkriegs: Tourismus und Frieden im Alpen-Adria-Raum (Cordula Wohlmuther & Werner Wintersteiner 著)

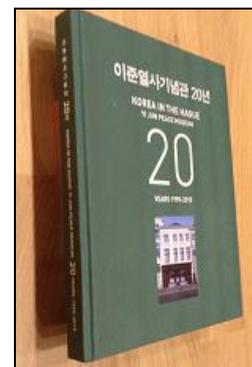
『そこで私たちの祖父がお互いに戦った』『第一次世界大戦の前線における平和への道：アルプス・アドリア地域における旅行と平和』という本は、第一次世界大戦の約百年後に出版され、その地域の国境を越えた平和の文化の旅行の意義が、分析されています。その本では3つの例を挙げて「平和の道」が示され、分析されています。オーストリアの最南端の州であるカリンシア、ソロヴェニア、イタリアの最北東部にありトリエステに州都を置いた自治州のフリウリ・ヴェネツィア・ギウリアの例です。これらの道は第一次世界大戦中山道でしたが、戦争と平和について討論するのに良いでしょう。この本の著者たちは、このような平和の道の平和的な効果の可能性について指摘しています。国境を越えた旅行の協力をする事で、経済的な効果があるでしょう。また国境を越えて平和と記憶の継承の活動をする事で、アルプスとアドリアの平和な地域を意識するようになるでしょう。ドラヴァ・フェアラーク(Drava Verlag) 著のこの本は、オーストリアのクラゲンフルトにあるアルプス・アドリア大学の平和研究・平和教育センターが、国連の世界旅行組織と協力して、旅行と平和に関する研究を行った結果、出版されました。



2014 年のはじめに同著者は、ツーリズムと平和に関する国際ハンドブック(the *International Handbook on Tourism and Peace*) という本を編集しました。この本は、次のウェブサイトから無料でダウンロードできます。

[http://www.uniklu.ac.at/frieden/downloads/International\\_Handbook\\_on\\_Tourism\\_and\\_Peace\(2\).pdf](http://www.uniklu.ac.at/frieden/downloads/International_Handbook_on_Tourism_and_Peace(2).pdf)

ハーグのイ・ジュン平和博物館の記念ホールの開設を記念して、1995 年から 2015 年までの 20 年間の活動に関する新刊本が出版されました。(詳細は上記をご覧ください。) ハーグのイー・ジュン学術財団代表のキー・ハング・リー氏によって執筆され、重要で豊富なイラストのある本は、その平和博物館が達成した印象的な事柄の記録をしています。



この本により、イ・ジュン平和博物館は母国以外に設立された最も重要な朝鮮の遺産を示した場所となりました。この本には INMP の名誉統括コーディネーターであるピーター・ヴァンデ

ン・デュンゲン氏による祝辞が含まれています。

(翻訳：山根和代)



## 編集後記

この通信は、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、山根和代、安斎育郎、ロバート・コワルチェックによって編集されました。

また日本語版の翻訳は、赤松敦子さん、狩俣英美さん、寺沢京子さん、山本美穂子さん、山本桃子さん、山根和代がボランティアで担当しました。この通信は、INMP の個人と組織をつなぐ重要な場です。また INMP の会員ではない方が世界の平和博物館の活動を知る上で、大変重要です。以前発行された通信は INMP のウェブサイトを読むことができます。

<https://www.inmp.net/>

INMP の通信は年に 4 回発行されますが、定期的に読みたい方は、メールアドレスを次のメールにお知らせ下さい。

[secretariat@museumsforpeace.org](mailto:secretariat@museumsforpeace.org)

2018 年 6 月に発行される次号に投稿したい方は、5 月 15 日までに原稿をお願いします (500 語以内、写真 1-2 枚)。直接英語による原稿を書くことに困難がある場合には、以下の INMP 日本事務局にご相談ください。

[info@asap-anzai.com](mailto:info@asap-anzai.com)